じゅうろく、じゅうひち、

りの。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
じゅうろく、じゅうひち、

【Ｎコード】
Ｎ９３２５Ｚ

【作者名】
りの。

【あらすじ】
舞台はカリフォルニア。

砂利道を踏みしめて遠くまで歩く。
かれこれ何時間歩いただろうか。
持ってきたおもちゃの時計はすでに午後三時十分のところでちょうど止まっている。
気づいたのは何時間歩いたかわからないほどのときだった。
それでも僕は汗まみれになりながらも、小さくてかたい青い水筒を肩に提げてずっと歩き続けた。
あたりには暑さで枯れてしまった薄い金色の草々が一面に敷かれており、この茶色くて肌色の砂利道だけが、その真ん中をつっきっていた。
かれこれ何時間歩いただろうか。
遠くまで続く道の切れ目には暑さのあまり熱で視界がもやもやしている。
どこまでも終わりはない。
けれどいまさら引き返すこともできそうにないし、いまさらするつもりもなかった。

きっかけは小さな出来事だった。
姉とのけんか。
暑さのあまり、二人ともずっと、この夏休みがはじまってからずっといらいらしていたんだ。
それがきのうの夜爆発した。僕がお姉ちゃんのベッドに寝っ転がっているのを、僕の姉は許せなかったのだ。汗まみれでそこに寝るな。
それでも僕は無視した。そして持っていたボールを何度も何度も上へあげて、キャッチしていた。
お姉ちゃんはもう一度言った。でも僕は無視した。
するとお姉ちゃんは急に叫んで、机の上にあった筆箱を僕に投げて

きた。そこから僕はどうしたのかよく覚えていない。ただ気が付いたら、僕らは椅子を投げ合い、ベッドをずたずたにし、ガラスを割り、殴って蹴って、お姉ちゃんも泣いて、僕も泣いていた。
泣いているお姉ちゃんは汗ばんでいてそれが僕の頭をよけいにおかしくさせるようだった。
ふと目を上げると、地平線が茜色に染まっていた。それを見て、僕はこの家をもう出ようと決意した。青い水筒に水だけ入れて、僕はお家にさよならをした。

もう水筒の中に水はない。
ふたをあけて、底に湾曲した雫をどうにかして舐めようとする。
すこしずつ僕のこころはなにか圧力に押されるようになっていた。
胸が苦しくなっていた。
そこから少し歩いたところで、僕はとうとう立ち止まってしまった。
それは僕の負けの証であり、僕が一人の子供になった瞬間だった。
乾燥した風の音と、鳥の鳴き声と、枯れた草が揺れる音しかしなかった。
いまは風はとても心地よいあたたかさで、静かに僕の頬をなでていった。
おねえちゃん。
僕は呟いてみた。
風がとても心地よいあたたかさで、静かに僕の頬をなでていった。
こどくを感じた。一度負けると、あとはもう止まらなかった。僕は前を向きながら何度も姉を呼んだ。
僕はただひたすら姉を呼び続けた。僕の姉がうしろからぎゅっと抱擁してくれるのを待っていた。姉の温かみが欲しかった。のどの渇きよりも、そっちのほうが乾いていた。そしてそれはずっと以前から思っていた事でもあった。
ふと傍を見ると、乾いた白い土が盛り上がっているのが見えた。
僕は道から外れて、その方へと向かってみた。

すると、その盛られた土のすぐそばに、穴があった。大きなあなだ。底から横長になっているらしく、強い太陽の日差しが濃い影を作っていた。錆びた鉄のはしごが下にむかっておりていた。
僕はそのはしごを使ってしたに降りた。余りの深さで、空気がとても湿っぽくてひんやりしている。
目をこらしても何も見えない。
太陽の照るこちらがわと、あなの奥とでは、住む世界が違うような気がした。
お姉ちゃん。
僕はそう呼んでみた。奥からなにかを引きずるような音がした。
僕はそれが姉だと思った。
僕は手を伸ばしながらゆっくりと真っ暗なあなの中を歩きだした。
ぱっと、僕のうでを誰かが握った。でも僕はそれがおねえちゃんだと、なぜかわかった。
「お姉ちゃん。どうしてこんなところにいるの？」
「ああ、あんたね。あんたこそどうしてここにいるの？」
「僕は今朝家を出たんだ。」
「それでここまできたっていうの？いま何時かわかる？」
うーんと僕は唸った。時計は壊れているし、そもそもここは真っ暗で時計が見えないからだ。
「わからない。でも四時くらいだと思う。」
「そう。あんた結構歩いたのね。」
「お姉ちゃんはどうしてこんなところにいるの？」
「好きでここに来たんじゃないわよ。誰かに連れてこられたの。たぶん、殺されるんだと思うわ。だから、さあ、もう逃げなさい。」
僕は姉に抱きついた。いままでの全部をあやまりたかった。
「いやだ、ここを逃げよう。」
「無理よ。足を繋がれてるの。どうがんばっても、とれない。」
僕は姉の身体を伝って細い足首にしっかりと結ばれた麻のロープを見つけた。結び目がとてもとても頑丈にできていた。

「ねえ？無理でしょう？」
突然僕は怒りがこみあげてきた。
僕は姉をまもりたいとおもった。心の底から、自分が変形するくらいにおもった。
僕はがむしゃらにそのロープを噛んだ。繊維の一本一本を丁寧に歯で切っていけば、必ずロープは切れると思った。
あうあうと僕は唸り声を上げながら僕はロープを噛み続けた。暗くて姉の表情は見えなかった。
どれくらいそうしただろう。麻のロープは半分の太さにまで減っていた。口の端が固い糸の繊維で切れてひりひりした。
もう噛むのはいやだったので、手で何度もひっぱってちぎろうとした。けれど上手くいかなかったから、また噛み直した。
ロープはすでに僕の唾液でぐちょぐちょに湿っていた。
「変わって。」
姉がしゃがみこんできて、僕にそう言った。姉は無言でロープを噛み続けた。
暗くて湿っぽくてひんやりした穴の中に、姉のロープを噛む音だけが聞こえていた。
やっと片方のロープが切れたけれど、もう片方の足に括られているロープも噛む切らなければならなかった。僕らはそれを交代ごうたいでやった。
僕はひそかに焦っていた。入口を照らしていた太陽が、だんだんと傾き、そしてだんだんと暗くなっていっていた。
姉をここへ閉じ込めた人がここへ再びこないかと、そればかりが心配だった。
僕は我慢して姉よりも長くそして強く噛んだ。
どうしようもなく恐くなって心臓がばくばくしていた。
姉は噛み続ける僕の頭にそっと手を乗せていた。
やっと姉は解放された。
僕は入口を出た途端姉を捕まえた犯人のバンがこの穴の側に止まっ

ているような気がして怖くてしかたがなかった。
姉が先にはしごを登り、そのあとに僕が続いた。
すっかり暗くなった空は満点の星が輝いていた。気温がとても下がっていて、汗まみれの身体を冷やして僕らは共に身震いした。
犯人のバンは見当たらなかった。僕がこの穴へ入る前と、ほとんどなにも変わってはいないようだった。
僕らは家のある方向へ手をつないで歩きだした。お互い無言だった。
姉の手は汗で湿っていたけれど、それは僕も同じことだった。ただ、握った手の姉の柔らかさだけが僕に伝わってきていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9325z/

じゅうろく、じゅうひち、

2011年12月29日02時51分発行